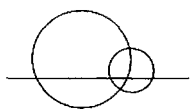


2007 年度 豊橋市民大学トラム 愛知大学連携講座 (6 回)



人物でたどる東亜同文書院から愛知大学

東亜同文書院大学記念センター運営委員 大島隆雄

【司会】 時間になりましたので始めさせていただきます。皆様、本日は市民大学トラムにお越しくださいましてありがとうございます。6 回シリーズとして開催した今年度のトラムも本日が最終回となります。本日は本学名誉教授で東亜同文書院大学記念センター運営委員の大島隆雄先生にご講演いただきます。大島先生は本学在任中、経済学部教授として西洋経済史をご専門に優れた研究を進められました。また本学の学生への教育活動の質向上を目的とした FD 委員会の初代委員長を務められた他、本学の要職を歴任されました。そして本学の創立 50 周年に当たっては愛知大学 50 年史の編集委員長を務められており、本学並びに東亜同文書院の歴史に関して極めて深いご造詣をお持ちです。本日は「人物でたどる東亜同文書院から愛知大学」と題しまして、書院と愛知大学の歴史に登場する代表的人物に関わる興味深いお話がいただけると思います。それでは先生よろしくお願ひします。

はじめに

【大島】 皆さんこんにちは。初めてお目にかかる方々もいらっしゃるかと思います。ただいまご紹介にあずかりました大島でございます。あまり造詣が深いと言われると恥ずかしいのですが、確かに愛知大学 50 年史はずいぶん苦勞して編纂しました。東亜同文書院のほうはこのプロジェクトが

始まって初めて深く研究するようになり、やっと 1 年半ぐらいしか経っておりません。藤田先生のような詳しい事情は知らないのですが、今日は思い切って今まで研究した成果を幾分かでも皆さんにお伝えしたいと思っております。

この連続講演におきまして、皆さんは東亜同文書院がどういう歴史的背景で形成されたかをお聞きになったかと思います。近衛篤磨とか荒尾精とか根津一といった人達の努力で作られたのは、何も中国が承認しない背景のもとでノコノコ出かけていって勝手に厚かましく作り上げたというものでは全然なくて、アジア主義という観点に基づいて、つまり西洋の列強が中国のみならず日本にも圧迫を加えている中で、中国を保全する、それから中国・朝鮮の近代化を助成・援助するという趣旨のもとで東亜同文会が作られ、そして中国・清朝の総督の承認と援助のもとに、その教育活動の中心的な機関として東亜同文書院が作られた、それはもう既に武井さんがご紹介してくれたと思いますが、とにかく中国の経済発展に貢献する、また延いては日本の経済発展に貢献するビジネススクールとしてこれを作った。それこそが中日友好の基礎を固めるという、非常に平和的で正当な理由をもって作られたわけです。

東亜同文書院は 1901 年に創設され、1945 年の日本の敗戦まで存続するのですが、その前半期、1920 年代ぐらいまではかなり順調に発展いたしました。日本政府と清朝との関係が日清戦争以後

平常の状態に戻り、清朝が1911年に辛亥革命によって倒れていきますが、日本の政府は新しくできた中華民国を1913年にいちおう国際的に承認しますが、蒋介石主導の国民政府の承認は1929年まで延ばします。けれども東亜同文書院の根津院長はいち早く、1911年～12年に辛亥革命が成功し、中華民国が成立した時点でこれを承認するわけです。中国の華中から華南にかけては中華民国の主体となった国民党の勢力が強かったせいもあって問題は起こらなかったけれども、その間日中の政府間にはいろいろと難しい問題がありました。1915年に「21か条」という非常に苛烈な要求を日本が突きつけるとか、1927～28年に「山東出兵」と言って国民党軍が北伐という形で北部の軍閥を制圧しようとした時には、日本軍が山東に出兵してそれを邪魔するとか、いろいろ難しい問題がありましたけれども、東亜同文書院と中国とのあいだには中・南部で国民党が強かったせいもあって深刻な問題は起こりませんでした。東亜同文書院の黄金時代が根津一院長のもとで展開されたわけです。1923年に根津一院長は院長を辞められます。

南京同文書院が1900年にでき、それが上海に移って、翌1901年に東亜同文書院ができた時には、山田良政やその弟の山田純三郎といった人達が、これは同文書院の枠組みを少し離れてしまいましたが、清朝に反抗する孫文の革命を支持しました。同文書院に迷惑をかけてはいけないということでそれを辞め、清朝を打倒する孫文の革命に参加します。しかし結果としてそれは中国の歴史を進歩させる役割を果たしましたので、山田兄弟の功績は非常に高く評価されています。こういうことで荒尾精、近衛篤麿、根津一、山田良政、山田純三郎、それに武井さんの話の中では日中関係がややこしくなるしばらく後まで院長を務められた大内暢三の話もあったと思いますが、日中関係には厳しい問題を抱えながらも、東亜同文書院は順調にと言うか基本的に平穏に展開してまいりました。

た。

そういった時代を前半期としますと、後半期は非常に難しいどころか、日中間で戦火を交えなければならない時代になってまいります。その段階で東亜同文書院あるいはその関係者がどういう対応をしたのか。難しい時期に関連する人々3人、近衛文麿、石射猪太郎、中西功の簡単な経歴と業績をお話してその問題を考え、東亜同文書院の最後の苦悩と終焉の過程を調べてみたいと思います。日本はご存じのようにアジア・太平洋戦争で敗北し、東亜同文書院が中国にいらなくなり、中核的な13名ぐらいの人々が中心になって、新たに京城帝国大学から引き揚げてきた先生や台北帝国大学から引き揚げてきた先生なども包含して、新しい時代にふさわしい新しい大学を作らなければならないということで、林毅陸、本間喜一、小岩井淨の3先生が愛知大学創立の中心になっていかれました。今日の話は非常に難しい話で、学問的に研究し出すときりが無いのですが、できるだけ分かり易く私の考え方を交えてお話ししたいと思っております。資料を用意しましたので、それらを適宜参照させていただきながら、話を進めさせていただきたいと思います。

近衛文麿

東亜同文書院は1901年に創立され、1945年に終わりを迎えます。その間45年ぐらいで、そのうちの前半期は根津一院長のもとで日中関係も悲劇的な様態にならず、ほぼ平穏に過ぎました。ところが20年代、30年代ぐらに入ってくると、1931年に満州事変が起こり、1937年（昭和12年）になりますと日中戦争が本格的に始まってまいります。1925年以降は言わば後半期に入ります。この時期に問題になりますのは近衛篤麿の子供である近衛文麿という人です。だいたいお歳の方もいらっしゃると思いますので、「ああ文麿さんか」ということでご存じの方も多し、ラジオでその声を聞いた方もいらっしゃると思うんですが、この

人は解釈においてなかなか難しい人です。その詳しい経歴は省略しますが1922年に東亜同文会の副会長になっています。26年の5月には副会長のまま同文書院の第5代院長になります。それで31年12月まではほぼ5年間院長を務めました。貴族院議員であり、主に東京にいて、上海に常駐されたわけではありません。上海で実際の経営に当たっていたのは岡上梁という副院長さんです。

しかし院長になったからには1回も顔を出さないわけにはいかないということで、1926年の10月に1度挨拶を兼ねて訪問し、30年には30周年記念式典に参列するため2度目の訪問をしています。この時は上海で中国国民党の要人達とも会い、さらに南京にまで足を伸ばして中山陵（孫中山つまり孫文のお墓）に行って献花している。この時まではどうということはない。近衛と中国との関係は悪くはなく、近衛の前半期、院長時代はさしたる問題もなかったんですが、問題はその後です。1936年に近衛は東亜同文会の会長になり、1946年の1月に同文会が解散されるまで、と言っても45年の12月に彼は自決しますが、それまでずっと東亜同文会の会長を務めました。同文会というのは既にお話を聞かれたと思いますが、同文書院の経営母体です。その会長でありながらご存じの通り3度にわたって近衛内閣を組織したわけです。日中友好という考えは完全には捨てたわけではなく、その考えで中国側、特に蒋介石の国民党側と裏で幾度か接触を果たして平和を模索したことも事実だけれども、基本的には軍部に引きずられてどんどん日中戦争を拡大してしまった人です。「軍部に引きずられて」というのはカッコ付きで、あとで若干修正しますが、その過程で重要なのは1938年の1月に出した「国民政府を對手（あいて）にせず」という声明です。これは【資料1】に挙げておきましたが、もう蒋介石の国民政府を相手にしない。首都南京が陥落したのがその前年の12月ですから、そのあとです。中華民国政府の首都である南京が陥落します。しかし蔣

介石は武漢に都を移し、次いで重慶に都を移して長期抗戦の構えをとります。そして北部には延安に中国共産党が本拠地を設け、八路軍が中国の正規の軍隊として認められる。そして抵抗していきます。

近衛は残念ながら言うか不幸にもと言うか、日中戦争を後戻りできないところまで押しやったわけです。そしてその後2回にわたって声明を発表します。11月には「東亜新秩序建設の声明」を。【資料2】を見ていただいても分かりますが、これは第1次声明を撤回する意図があったのです。と言うのは例えば、「國民政府と雖も従来の指導政策を一擲し、その人的構成を改替して更生の實を挙げ」れば、「敢えて拒否するものにあらず」と第1次声明の撤回を意味するのですが、その内容は、指導政策を一掃して人的構成を替えるならば、自分達もこれを受け入れようというものです。これは何を意味するかと言いますと、国民政府のその時の重要な人物として汪兆銘（日本では汪精衛とよく言われていた）を重慶から引き出す、重慶を脱出させることを意図した声明であります。事実、汪兆銘は脱出しました。ハノイを経由して上海に行き、そして南京へ移ってまいりまして、やがて1940年に南京に中華民国政府を樹立します。これは日本の傀儡政権です。

第3次声明は汪兆銘を重慶からおびき出す声明の1か月後に出すわけですが、【資料3】にあるように「終始一貫、抗日國民政府の徹底的武装掃蕩を期すると共に、支那における同憂具眼の士と相携へて東亜新秩序の建設に向つて邁進せんとするものである」、と述べています。中国の中で日本に味方してくれる人間のことを同憂具眼の士と言っている。具眼というのは物事の是非を見抜く力を持った、物分りのいい人ということです。そして東亜新秩序を建設するという内容は日・満・支です。日本と満州国と中国、この場合蒋介石の国民党と共産党は除くわけです。因みにこの共産党と国民党は抗日統一戦線という形で連携しています。そういう蒋介石の国民党と共産党を除いた

中国との連携が東亜新秩序と言われるものです。

あとは日中戦争がどんどん長期化していきまして、近衛はその間第2次、第3次内閣を組織します。第2次内閣の時の40年9月、日本は北部仏印に兵を進め、また日独伊三国同盟を締結しました。そして第3次近衛内閣期、日本が南部仏印に進駐すると、41年8月にはアメリカの対日石油輸出停止が行なわれて、結局日中戦争は日米戦争、あるいは日米英戦争、太平洋戦争へと進んでいったわけです。

ところで1939年には、東亜同文書院はこの間に専門学校から大学へ昇格します。これはどういう動きかと申しますと、1937年、昇格の2年前、日中戦争が始まって間もなくの9月、東亜同文書院が一時戦火を避けて長崎に引き揚げます。院長は大内暢三さんです。彼が決意して、これからはますます中国大陆で活躍する人材が必要になる。それから戦後（と言っても日本が勝ったあとの戦後）の中国経営のためにも人材が必要である。従ってここで思い切って専門学校を大学に昇格させたい。人員も増やしたい。今まで1学年100名ぐらいだった定員を160名ぐらいにしたい。それを1938年に、総理でもありました東亜同文会の会長近衛文麿の名前で自分の内閣、近衛文麿内閣の外務大臣（所管官庁）有田八郎に提出する。そしていろいろ審議の結果1939年（昭和14年）に認可されます。その時の総理大臣は阿部信行で、阿部総理は東亜同文会の理事長でもありました。だから東亜同文会の会長が総理大臣のとき大学昇格を申請して、東亜同文会の理事長が総理大臣の時にそれが認可されて大学になるという経過をたどるわけです。つまり日中戦争が大学昇格を決定していった大きな要因であると言っても過言ではありません。日本には戦前54の官公私立大学があったわけですが、その最後のほう、51番目に大学になった例です。あとは皇學館とか、戦時体制を反映して興亜工業大学とか、大阪理科大学とか、だいたい理工系の大学です。専門学校が大学になるのはいいことですが、不幸なこと

にそういう日中戦争の必要性、それから日本が中国に勝ったあとの（勝つと勝手に思っていて結局負けるんですけども）経営のための人員を養成するために作られたわけです。

近衛文麿についての評価は非常に難しい。彼は非常に思慮深い聡明な人で、家柄は日本一です。藤原鎌足に遡るわけですから千数百年明確にたどれる五摂家の筆頭です。従って上品でエレガントな、私なんかとても側に寄れないような人です。けれどもよく言われているのは気が弱い、意志薄弱ということです。従って軍部にどんどん引きずられていった。彼は本当は平和主義者なんだということで彼を免罪しようとする歴史家、政治学者もいます。例えば近衛のブレンだった矢部貞治という東大の先生がおられましたが、彼の書いた2冊の分厚い伝記（読むのに苦労しました）は、だいたいそういう基調で書かれています。しかし多くの学者はそんなことはない。例えば同じく東大の先生で岡義武という人が岩波現代文庫に書いておりますが、「気が弱いということだけで責任は免れない。気が弱いということが責任になるんだ」と、やはり彼は戦争を推進した人物の中に入るから戦争責任があると言います。

ところで、これは私も確認できることですが、気の弱い人が時々「俺は強いんだぞ」と自己主張することがありますけれども、そういう感じで、近衛がむしろ軍部を先導する、引きずるという事態もみられるのです。その第1は、1937年の7月7日、盧溝橋事件勃発後、最初は不拡大・局地収拾方針であったのが、その4日後の11日に3個師団の動員が閣議決定され、翌12日に近衛は「重大決意表明」を行い、戦争の本格的開始を宣言します。これが近衛が行った第1の飛躍です。

それからもう1つは、1937年末から38年初頭にかけて当時ドイツの駐華大使であったトラウトマンという人を仲介にして、何とか日中間の平和をもたらそうという努力があったわけですが、日本はこれをさっさと断った。この時は参謀本部の

石原莞爾は満州事変の時、率先してやった人ですが、日中戦争の時は北を固めないといけない、つまりソ連に対決しないといけないから、中国とは全面戦争をしてはいけないという立場に変わっていた。そういうふうな参謀本部の意見があったにも拘わらず、近衛は、後戻りのできない「国民政府を對手とせず」という声明を発してしまった。これが近衛が行なった第2の飛躍です。私の友人であった愛大の現代日本政治史の江口圭一教授は、残念ながら4年ほどまえに亡くなられたですが、そのことを著書『十五年戦争小史』において明記しています。

教科書裁判で有名な家永三郎氏はどういうことを言うかと言いますと、これはあとでいろんなことに関連してまいります、「支配者というのは必ずしも1つのグループではない。支配グループというのは幾つかある。日本では軍部もあれば天皇的な宮廷的なグループもある。それから三井のような大資本のグループもある。その中で日本では軍部が中核になっている。各グループは全体として権力をもっており、国民を動員する強制力を持っているから、それが犯した戦争ならば、近衛は気が弱い、軍部に引きずられた、責任はないんだとは言えない。やはり全体としてその時権力の側にあって、国民を動員し戦争へ導いた人達には重大な責任があるという考え方です。これは私も、その通りだと思います。例えば私はドイツのことを長くやっていたけれども、ドイツではナチ党、軍部、それから大金融資本、こういったものが連合して勢力を持ちます。日本では軍部が主導です。ところがドイツではナチ党という党が主導します。これはやはりナチ党が一番悪いという考えなんですけれども、やはりその時の権力の側にいた者が連帯して責任があるというふうに考えている。

それからそれに動員された国民の側、これは基本的には被害者である。被害者ですけれどもここにもさまざまあって、例えば徴兵令を受けて軍隊にとられた、しかし中国に行って戦争をして中

国人を殺した、これは被害者であると同時にやはりその限りにおいて加害者でもあるという戦争責任を負わないといけないというふうに家永さんは言います。それからもう1つ、後に本間先生の話と関係してくるんですが、そういったトップリーダーではなくサブリーダーと言いますか、中間・下級指導者というものがいろいろいるわけです。いくら近衛が大演説をぶっているんな声明を出そうとも、それはやはり町内会長とか、あるいは大学の学長とか、そういった者がさらに下の人々を組織していくから、トップグループに強制されたと同時に、さらに下の人達を組織したという意味で、その限りにおいて一定の戦争責任が生まれるということを家永さんは言っています。家永さんが言っているというよりも、実は丸山眞男という東大の政治学教授がそういうふうに戦争責任を理論的に整理して、家永さんはそれを受け継いでいるわけです。

同文書院のことに戻りますが、同文書院は自分で大学昇格を言い出したんですけれども、結局近衛によって大学昇格の申請書を出して、同じく同文会の阿部内閣によってこれが認可される中で、当然日本が進める日中戦争に対して責任が出てくるわけですから、そういうふうに進まざるを得ないわけです。[資料4]は、近衛が総理大臣になり、同時に同文会の会長である時に、同文書院に触れた演説であります。卒業生は2,800余名に達したと。そして中国においてや内地において中国に関わるところでいろんな仕事をしている。「かつ刻下の時局（日中戦争が展開され始めたこと）にそれぞれ多大の寄与貢献もなしつつあるのであります」と。同文書院は完全に戦争に巻き込まれて、その重要な一環を担う大学に公式的にはなっていました。しかしそれに反対・抵抗する人もいろいろおりました。その話をこれからしていきます。

石射猪太郎

東亜同文書院関係者はみんながみんな否定的な

人ばかりではない。むしろ肯定的な人もいろいろたくさんいるわけです。そこに私は同文書院・愛知大学史を研究していて救いを感じます。次に紹介するのは東亜同文書院の第5期生である石射猪太郎です。彼が持っていた同文書院精神は、[資料5]に現われております。これはなかなか骨のある人です。石射猪太郎は外交官試験に合格し、東亜同文書院の卒業生として最初に外交官になった人です。初めはいろいろ見習いの的な仕事をしているんですが、駐米幣原喜重郎大使のもとで3等書記官になり、ワシントン会議でも随員をやっています。彼が目立った活躍をするのは1931年(昭和6年)、吉林の総領事時代です。満州事変が勃発し、関東軍は「吉林を占領するから総領事の名において、居留民を保護するために軍の吉林出動を要請せよ」と依頼した。それに対して彼は断固として断った。「自分は関東軍の部下ではない。外務省の部下である。外務省は不拡大方針だからそんな要請は出せません」と。しかしいよいよ吉林占領が避けられないと思ったので、現地の中国軍の司令官と相談し、「流血の惨事を起こすな。中国人も日本人も犠牲になる」と、平和的な占領を仲介したわけです。関東軍は彼が言うことを聞かないということで、翌年の関東軍参謀会議で「石射は勝手なやつだ、辞めさせろ」という抗議文を出している。(電報だったと思いますが。)石射の自叙伝風の『外交官の一生』という本がありますが、これは面白いですよ。あまり高い本でもありません。ただ今のところ絶版になっているようです。自分は軍に対して「パッシブ・レジスタンス」をした。積極的なレジスタンスをしたわけではないけれども、消極的な受身的なレジスタンスはしたんだと書いております。

もう1つの頂点は、のちに彼は次第に出世して外務省東亜局長になります。外務大臣、外務次官、その下に欧米局とか通商局とか幾つかありますが、そのうちの東亜局長ですからこれは高級官僚です。その時に蘆溝橋事件を発端として日中戦争

が勃発します。最初は不拡大方針、現地収拾方針ですからその立場に立って彼は文書を書き、とにかく中国へ行く3個師団の動員を阻止しようとしたわけです。そして休養先の鶴沼から帰京してきた上司の広田弘毅外相を東京駅でつかまえて嘆願書を出しますが、閣議であっさり否決されてしまう。認められない。

さらにもう1つは1938年、外相が代わって宇垣一成になりますが、その時に「今後の事変対策についての考察」という文書を書きます。これは今でも外務省に残っているそうです。私は現物を見ておりませんが、国立公文書館にもあるかと思っています。内容は次の6項目です。「寛容な態度で中国の面目を立てる」、「主権尊重」、「蒋介石の下野を要求せず」、「内政不干渉」、「国民党解体を要求せず」。蒋介石の下野を要求せずとか国民党の解体を要求せずというところは、内政不干渉と言ってもいいと思います。それから「経済提携重視」です。主権尊重、内政不干渉、平等互惠といった、戦後一般的に認められた外交原則のうちのほとんどを網羅しています。非常に画期的な内容です。ないのは日本軍がこの際、全面撤退せよということだけです。

石射ほどはっきりした行動はしておりませんが、こういった人が同文書院出身の外交官に何名かおります。若杉要、堀内干城、山本熊一といった人達がそうです。石射を先頭とするこういうグループをどういうふうに規定し特徴づけるかと言いますと、私はこれを体制内抵抗勢力と呼びます。体制内という意味は、権力側で今までそういう積極外交はしない、つまり対中国強硬外交はしない、むしろ協調外交をしたいというのが、幣原外相等を中心とする主要な勢力であったわけです。ところが軍部がのしてきて、それから近衛が出てきて、対中国積極外交、強硬外交になっていくわけです。それを今までの外交方針で、支配勢力の内部の立場から阻止しようとしたわけですので、言わば体制内の抵抗勢力であるというふうに私は規定します。

これは実は日中戦争を阻止できる可能性をもっ

ていた最大の勢力であります。なぜかと言えば従来の方針がそうだし、外務官僚のほとんどはそうだし、近衛だって最初は表面的には現地収拾、不拡大方針です。天皇もその頃はそうだった。天皇は近衛ならば軍部を抑えてくれるということで近衛を引き上げてきた。その意味ではこの勢力がもっとしっかりしていれば日中戦争は阻止できたけれども、それができなかった。そういう役割の要にいたのがこの石射です。これは非常に偉い人だと思います。石射が、近衛をいかに痛烈に批判しているかは、興味深くも[資料6]が示しています。どの本も石射を絶賛しています。その評価についてはまた後に触れます。

中西 功

次に述べる体制外抵抗勢力というのは、これも東亜同文書院から出てくるわけです。中西功がその代表的な人物の1人ですが、これは言わば体制外抵抗勢力であって、体制の外に立って根底から日中戦争を妨げようとした人々であります。中西は三重県出身で、[資料7]が示すように東亜同文書院に入りますが、2年生の時に学園紛争が起こります。その当時本土でも帝国大学や旧制高校でどんどんこういう学園民主化闘争が起こっていたんですが、それに類似した形での闘争を行っていました。その時東亜同文書院の中に中華学生部という、中国人の学生を教育する部門がありまして、その学生が中国共産党の影響を受けていた。そういうこともあって東亜同文書院の民主化闘争とは一応別のことでありますが、中国共産党の影響が浸透し始めていました。そこにこれは中華学生部の学生ではなく王学文という堂々たる人物がいて、彼は日本へ留学して旧制四高から京大で経済学を学び、河上肇の弟子で日本語が非常に上手でした。中西功は中国研究会で彼に感化されます。その後東亜同文書院の卒業生が上海に寄港している日本の海軍に対して反戦ビラを撒く。非常に冒険主義的で、そんなことをやっても大して意味は

ないんですが、自分達的意思を示そうという形でちょっと跳ね上がった闘争をするわけです。これは日支闘争同盟という組織です。

反戦ビラ配付に加わったと疑われて、中西は一時領事館警察に逮捕されますが、直接関係なかったので釈放されて同文書院に戻ります。その後は外国兵士委員会というのに所属します。上海にはイギリス海軍もアメリカ海軍もフランス海軍も日本海軍も絶えず軍艦を停めている。上海にいるそれぞれの外国人は中国人（中国共産党系の人だと思いますが）と一緒にあって、例えば日本兵士委員会、フランス兵士委員会、アメリカ兵士委員会、そういった組織を作るわけです。そして盛んにビラを撒いたり水兵に反戦工作をやったりという活動をします。日本委員会はあまり強くはなかったのですけれども、フランスの外国兵士委員会などはすごいもので、桃色だか赤だかのビラを撒き散らしてフランスの軍艦を真赤にしたというようなこともあり、相当活発にやっていました。中西はその日本の兵士委員会の活動をしますが、やがて日本へ一時戻って日本の革命勢力と連絡するようになり、やがてあのゾルゲ事件で有名な尾崎秀実の紹介で満鉄調査部に就職します。満鉄でいろいろ苦勞するんですが、最後に支那抗戦力調査委員会のメンバーになって、支那抗戦力調査報告というのを仕上げます。三一書房によって現在復刊されたものは、上下2段組みで600頁ぐらいの大きな本で、私も全部読みきれず、あっちこっち拾い読みをしたにすぎません。

そして中西は最後にそれを満鉄調査部としてまとめ、中国の北京や満州で、それから日本でも1940年に東京へ来ていろんなところで報告します。その報告の内容は、詳しく紹介していきりがないんですが、要するに日中戦争は軍事的には中国を屈伏させることはできない、無理だ。これを解決するためには政治力を用いる、つまり外交的な力を用いる以外にないと、こういう結論でした。何百名と集まった陸軍省・参謀本部の将校

の前でそれを堂々とやった[資料8、参照]。太平洋戦争が起こる半年前、日中戦争が完全に行き詰まった時期です。言葉をかえれば日本軍は中国から全面撤退しなければならないということですから、すごいことを言ったわけです。尾崎秀実とも連絡をとっていて、尾崎もそれでいけということ saying it.

40年の6月ですから日中戦争も行き詰まっています。日本が北部仏印へ進駐する前で、第2次近衛内閣ができる直前です。軍部や当局はもちろん聞く耳を持ちませんでしたけれども、もし仮にこの時中西などの勧告に従って外交交渉に切り換え、日本の軍隊を撤退させていれば、日中戦争はそこで平和のうちに終わり、太平洋戦争への発展は避けれたわけです。因みに中西の近衛体制に対する厳しい批判については、[資料9]を参照してください。とにかく中西の活動とその報告は貴重なものであり、家永三郎氏もこれを非常に評価している。中西は左翼です。革命的左翼です。中国共産党や延安とも連絡があったわけです[資料10、参照]。日本の左翼とも可能な限り連絡がある。そういう意味で彼を体制外——この場合、抵抗運動にたいして「体制内」とか「体制外」とかの概念を用いるのは、私の分析方法です——の抵抗勢力というふうに私は位置付けております。こういう学生が東亜同文書院の26期から32期の7学年のあいだに40人ぐらいいた。1学年平均5～6人いるわけです。1学年平均100人で4学年の専門学校ですから約400人としますと、そのうちの20人ぐらいがこういう左翼勢力ですから、東亜同文書院の学生はだいたい5%ぐらいがこういう思想を持っていた。飛び抜けて多いわけではありません。当時、もう少し前ですが東大には新入会というやはり左翼的な学生グループがありました。これは1918年末に民本主義の吉野作造教授のもとで生まれて1928年に解散するまで、だいたい11年間に350人の左翼学生が東大にはいた。東大の学生の総人員は3学年で約6,000人、その

うちの90人ぐらいがそうです。絶対数では1学年、同文書院の場合は5～6人。東大のほうは約30人と多いですが、学生が左翼の影響を受けた比率は、東大は約6,000人に対して約90人、同文書院は約400人に対して約20人ですから、東大の場合は約1.5%、同文書院のほうが約5%と、同文書院の方がずっと高いわけです。

なぜこんな抵抗者を成功もしないのに取り上げて強調するのか。彼等の抵抗は成功しなかったし、特に体制外抵抗勢力が成功する見込みはほとんどなかった。しかし日本全体が結局誤った道を突き進んで敗戦の悲劇を味わい、国土が焦土と化した時に、日本にもちゃんと「戦争はだめだ、そんなことをしたら日本は大変になる」ということを言った人がいたということは非常に大きな意義があることです。韓国人や中国人は「日本人はみんな戦争責任者だ」みたいなことを時には考えがちですが、そういう人達と話す時に私はいつも言うんですけども「いや、こういうこういう日本人もいたんだ」と。「ああ、そうか」ということで納得する。「我々は日本の支配者と、犠牲になった国民との間に明確な区別をしているんだ」というふうに話は進む。そしてこういう抵抗勢力は日本の従来のファシズム体制が崩れたあと、政治的にも実際に非常に権威を持つわけです。名誉な存在として浮かび上がる。例えば石射は政治家にはなりませんでしたが、こういう系列の人で幣原喜重郎は総理大臣になった。よく似た人で吉田茂といった人達はいずれも政界の第一線に立ちました。親米協調的な吉田も戦争末期には憲兵に睨まれて牢獄に放り込まれたわけでしょう。それから反体制派的な勢力の人々、例えば野坂参三は中国の延安で活動したのち帰国したし、中西とか西里竜夫、尾崎庄太郎といった人達も共産党へ入って頑張り、中西は参議院議員になりました。ですからこういう抵抗勢力はその時成功しなくても、従来の体制が崩れたあと飛躍的に認められる、そういう人達です。その意味で抵抗というのは、

たとえ負けても重要であり意義をもつものなのです。そういうふうに私は考えて位置付けております。

林 毅陸

時間が迫ってまいりました。皆さんがせっかく来られたので最後の5分ぐらいは残して質問を受け付けたいと思います。ここで直接愛知大学に関わるお話をいたします。林毅陸先生。彼は非常に学問的に一生懸命研究をされた立派な学者です。彼が西欧外交史について書いた4大著作がありますし、その他にも論文や評論が数限りなくあります。私も可能な限りは読んでおります。慶応義塾をトップで卒業され慶応の先生になられた。ところが慶応の先生になったあと約10年間政治家になります。無所属で当選し、大正デモクラシー的な思想をお持ちだったので、そのうち政友会に所属します。尾崎行雄や犬養毅は政友会が藩閥的な山本権兵衛内閣に協力したのに嫌気がさして脱党し、政友倶楽部というのを作ったので、林先生もそれに所属して、山本総理の施政方針演説について厳しい批判的な演説をします。その中心は「陸海軍大臣現役武官制は憲法（旧憲法）運用上問題がある」ということです。戦前の旧憲法では天皇が全権を持っている。その行政権を輔弼する国务大臣がいる。そして陸軍参謀本部と海軍軍令部が軍政、統帥権を補助する。これは截然と区別されなければならぬ。内閣は軍部に口出しできないし、軍部も内閣には口出しできない。ところが陸軍大臣・海軍大臣がもし現役制ですと、参謀本部、軍令部が内閣を掣肘することになる。統帥権の独立ならば独立でいいから、截然と区別するなら、陸軍大臣、海軍大臣は必要だが参謀本部・軍令部の言うことを聞くような現役であってはならないという主張です。これはその当時としては旧憲法の自由主義的なリベラルな解釈であり、美濃部達吉教授もそのように解釈していたと思います。だから歴史家は林氏を大正デモクラシーの優れた政治家であったというふうに評価しています。

しかし問題もないわけではない。それは彼が政治家を辞めて大学に復帰し、1936年、東亜同文会の理事になってからです。彼は同文会の理事ですから、入学前に学生が東京に集まってきた時の招見会という入学式みたいなもので挨拶したり、東亜同文書院を1回訪問して講演したりしておりますが、同文書院の教員にはならなかった。そして理事として、詳しい話は省略しますが表面上はやはり大アジア主義の立場に立って日清戦争、日露戦争、それから満州事変、日中戦争を肯定しております。[資料11]を見てください。しかし裏面ではと言うか陰ではと言うか、建前と本音とちょっと違うところがあって、私的な懇親会、情報交換会ではヒトラーを罵倒している。そのことが軍部に知れ、彼がリベラルであるということもあってラジオの解説者から外された[資料12、参照]。しかし戦争は敗れ、彼は戦後枢密顧問官になる。当時の日本の立法府は、衆議院があり、それと同等の立場で貴族院があり、もう1つ枢密院があった。国権の最高機関である現在の衆議院と違って、衆議院の地位は非常に低い。掣肘機関が幾らもある。重要なことは衆議院で通過し貴族院で通過しても枢密院で否決されることがある。戦後はマッカーサー支配下の日本ですが、新憲法が公布されるまではまだ旧憲法が残っている。だから重要事項は枢密院で承認しないとイケない。林氏は新憲法の草案や教育基本法や学校教育法といった、戦後の日本に民主化をもたらした重要な法案を全部審議し、それを了承している。そういう意味でオールドリベラリストが民主的な人物に転換した[資料13、参照]。そして愛大新聞の創刊号に書いてあるように、「この新しき生命を象徴するものこそ、我が愛知大学である。文化国家の具体的実現者、学問民主化の実体的担当者、これこそ我が愛知大学の使命とする処である」[資料14]というふうに、高らかに愛知大学の建学の精神を彼の言葉で語っているわけです。だから私はオールドリベラリスト、大正デモクラシー思

想の持ち主林毅陸は、戦争の苦難・混乱を経て民主主義者に転換したと評価しています。これが愛大の初代の学長です。

本間喜一

次に本間先生。既に大学記念館の展示場は見学されたかと思いますが、まだご覧になっていない方は、新たに本間喜一コーナーというのが最近できましたので、そのうち見てほしいと思います。この人はどういう人かと言うと出身は一高・東大です。次の小岩井さんも一高・東大です。昔の一高・東大というのは震え上がるほどの秀才であります。私は1935年生まれで新制大学卒ですが、上の兄貴などは旧制ですからその辺の雰囲気はだいたい知っております。一高には並大抵の努力では入れない。そして東大も。田中耕太郎とは一高・東大で同年同級です。田中耕太郎は終戦直後は文部大臣で、第2代の最高裁長官になった秀才ですが、本間先生もこれと並ぶ秀才でした。司法試験（当時は高等文官試験）をトップで通り、東京を中心とした検事局の検事になったり判事になったりする。しかしここが偉いところで、判事になって正しい判決を下すために大変迷う。そこでもう一度、自分は法学を勉強し直さないといけないということで、東京商科大学（一橋大学）の予科の教授になる。そしてドイツへ留学し、ワイマール憲法のもとでの民主的なドイツで、SPD（社会民主党）のラートブルフ（ワイマール共和国の時代に2度も法務大臣になった）の法哲学の勉強をする。本間先生が留学したちょうど1923年というのは、伝説的なドイツの超インフレの時期で、最後には1兆マルクを1マルクに交換しないといけなかった。この体験が同文書院の最末期に生きてまいります。

留学から帰ってから今度は東京商大の学部の教授になりますが、いわゆる白票事件（この内容は省略しますが）で辞める。本間さんというのは筋の通らないことがあるとすぐ辞めるという癖があ

ります。これがその1回目です。その後弁護士を務めていたんですが、文部省の役人に気に入られて東亜同文書院の副院長兼大学教授になる。大学昇格が決まった翌年ですから、そこで大学としてのスタッフの整備に努力する。しかしその時も院長の矢田七太郎と意見が分かれてパッと辞める。気に入らなかつたらすぐ辞めてしまう。そう言ったら本間さんに怒られるかも知れません。その当時自治会はすでに解散されてなく、学生達は何かひそひそ相談して血判状まで書いて、「先生戻ってください」ということになり、戻って学長に就任し、やがて東亜同文書院の幕引きをすることになります。学生達に心を動かされた。この血判状は今も記念館の大学史の中の本間喜一コーナーに展示されていますから、どうぞご覧になってください。

そして先ほど言ったドイツでのインフレ体験を踏まえて終戦の準備をする。必ずインフレは起ると、旧運動場を売却してゴールドバーに変えた。事実最後に日本からの送金も途絶えた中で200名以上の東亜同文書院の学生や教職員を食べさせ、無事日本に引き揚げることができたわけです。あとはもういろいろ聞かれたと思うので言いませんが、本間先生の偉いところは、先ほど言った体制内のサブエリートとして自分にも戦争責任があるとはっきり認めるわけです。だから自分は学長になる資格はないということで、最初は一理事として留められた。戦争中はファシスト的なことを盛んに言っているが戦後口をつぐんで何も言わず、何もなかったかのように済ました教育者や学者もありましたけれども、本間先生は、[資料15]にあるように、「自分は最早や学長としての資格はない。毎年毎年十二月八日（太平洋戦争が始まった時です。私は国民学校1年でした）には宣戦の勅語を奉読し、或は壮行の辞を述べて多くの青年学徒を戦地に送った。その結果は今日の敗戦である。再び帰らぬ多くの学生たちのことを考えると実に申訳のないことをしたと思っています。自分は最早や教育者としての自信をも失くし

つつある。大学はできても、自分はいくまで理事者として力をつくすのみだ」と、こういうふうになんと自己批判をするわけです。そしてしばらく経って実際に新しい日本、新しい大学が建設されていく中で、では表に出て仕事をせざるを得ないということで第2代、第4代の学長になるわけです。しかし本間先生の御苦労はなお続きます。第2代学長時代、本間先生は愛大事件に遭遇して、学問の自由と大学の自治を守るために奮闘されました【資料16、参照】。また第4代学長時代には、山岳部の薬師岳遭難事件にあって、人命救助のため獅子奮迅の努力をされました【資料17、参照】。そこで発せられたかずかずの名言を味わってください。

小岩井 淨

次に第3代の小岩井淨、この人も少年のころ神童と言われた人です。松本中学に入学して、その頃は私も好きだった詩人石川啄木に感激している。そういう文学少年だった。そして一高・東大。東大でさっき言った新人会に入ります。同期には細迫兼光という人がいます。戦後社会党左派で活躍する人です。そして初めは世俗的な出世も考えて外交官になろうかと思ったんですが、弁護士になって社会運動に貢献しようとする。これは偉いことです。大秀才でおとなしくしておれば末は次官か大臣です。ところが社会運動に貢献する。大阪へ行って弁護士になって、農民組合の顧問弁護士、あるいは労働組合の労働学校の建設、それから水平社の顧問弁護士などいろいろやる。そしてこの頃、1922年に共産党が創立します。その時に入るんです。そして大阪の支部長になる。ところが当時の共産党は後でもそうですがまだ固まっておられません。2年後の1924年には解党する。それ以後の彼は再び共産党に入ることはなかった。いろいろな経過は省略しますが、基本的には合法左翼の最左翼として活動します。共産党はもう非合法化されていますし、多くの者が牢獄につ

ながれていますから、実際の指導はできないわけです。ですからそれに代わって他にいろいろ社会大衆党とかの社会民主主義的な政党がありますが、その左翼として早稲田大学の大山郁夫、京都大学をもう辞めておりましたが河上肇、それから東京で非常に活躍しておりました加藤勘十（戦後は社会党）、こういう人達と一緒に合法左翼のぎりぎりのところで活動します。ところが何度も投獄されて2度も転向することになる。この辺は歴史家岩村登志夫さんの研究による評価がうまくまとめております【資料18、参照】。

小岩井先生、この人も偉いです。確かに敵に屈伏して転向した。「戦争を遂行し日本にファシズム的な体制を樹立した勢力に屈伏したことは本当に残念なことである。間違いでした」ということを公に自己批判する。この公に自己批判するというのが重要なことなんです。これは本当に誠実な人間のすることです。あの戦前のすさまじい弾圧のもとで転向したということを誰も非難できない。それを「間違っていました」と、戦後大阪で共産党の候補を応援する中でいうわけです。以後は共産党にももちろん入れない。当時共産党には徳田球一という指導者がおりまして皆さんも知っていると思いますが、ちょっと家父長的な、あまりインテリでもない親分肌の人でした。彼に嫌われて共産党に戻れない。では自分は左翼として統一戦線のために闘う。教育のために闘う。愛知大学のために頑張るという形で過去の誤ちの一切を克服するわけです。

むすび

ですから私が申し上げたいのは、東亜同文書院の後半はすさまじい混乱で、日中戦争を推進した勢力も出た。しかしそれを今までの立場に立って体制内から阻止しようとした石射のような人も出た。体制外から根本的にこれと闘おうとした中西、西里、尾崎庄太郎といったような人も出た。そして最後に抵抗勢力は全て潰されたけれども、

戦争そのものが敗北することによって今までの支配勢力は基本的に壊滅した。その廃墟の上に東亜同文書院の進歩的な伝統を受け継いで、新しい理念のもとで小岩井さんが起草されたと言われる設立趣意書〔資料19、参照〕に書かれているように、民主主義、世界平和主義、そして豊橋・愛知県・中部地方を中心とした地方重視という理念を持ってできたのが愛知大学です。同文書院は直線的に愛大になったのではない。同文書院は一時完全に潰れたので、愛知大学は法人的にも学校的にもこれは別のものです。しかし同文会や同文書院の中の新しい時代を切り開こうとした人達を中心に、新しい理念のもとで作られたのが愛大であって、その限りで同文書院の肯定的な面を受け継いで甦った大学というふうに私は感じております。

ほとんど時間がありませんが、せっかくですし、早口でしゃべったので分かり難いところもあったと思いますので、どうしても聞いておきたいことがございましたら質問してください。

質疑応答：

【質問者】 石射さんという方は東亜局長を辞任なさったあと何をしていたらしゃったんですか。

【大島】 詳しい履歴をいうときりがありませんけれども、そのあとはいろいろな国の大使を歴任されます。しかしまあちょっと冷や飯的なところですよ。最後はビルマ大使ですが、ビルマは大東亜共栄圏の中に入っておりましたから、そのことで戦後公職を追放されました。しかし私には、例のユダヤ人のためにビザを書きまくった杉原千畝とどこか似た感じがします。

私の話はどちらかと言うと今までの人の話とちょっと違うと思います。テーマや時代が違ってあるせいもありますけれども、どこが違うかと言うと大学史で人物を扱うと全部神格化してしまう。慶応大学の福沢さんは偉い人だ、同志社大学の新島さんも早稲田大学の犬養毅さんも偉い人だ、と。だから東亜同文書院の正史には、近衛文麿が

院長として上海を訪問したことだけ書いてある。そのあとのことはほとんど書いてない。最後に自決したということだけは出てくる。本間先生がこういうふうに自分の戦争責任を自己批判しているということもあまり言わない。まして小岩井さんが2度も転向しているということ、しかもそれを自己批判したということは、愛大の正史には書いてない。これでは不十分である。

人間は歴史の中でいろいろな功績もあると同時にいろいろな過ちも犯すのであって、それはちゃんと書かないといけない。ただ自虐的に書くのではなくて、それを彼等はどのように公に自己批判し克服したかということまで書かないといけない。この分析視覚は今日の日本全体の大学史研究の1つの流れになりつつあります。そういう意味で私はずいぶん愛大の創立者なんかの消極的な面と言うか否定的な面までズバズバ言いたと思いますけれども、彼等は自己批判してそれを克服しました。それが偉い。そのことが却って偉い。あまり神様扱いにしたらだめです。慶応の福沢とか、同志社の新島とか、早稲田の犬養毅とかのいいところばかり書いたら、それは物語であって歴史にはならない。私は現在の科学的と言われている新しい大学史の流れに拠っているつもりです。あまり皆さん「大島先生むちゃくちゃ言ってたぞ」というふうに思わないでください。全部は説明できませんでしたが、資料をできるだけ正確に作ったつもりですので、また何かの勉強に利用していただきたいと思います。

【司会】 それでは時間になりましたので本日の講座はこれで終了させていただきます。大島先生にもう1度拍手をお願いします。

今年度の豊橋市民大学トラム愛知大学連携講座はいかがでしたでしょうか。来年度以降もより充実した講座を開催したいと考えておりますので、今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございました。